

Title	研究拠点としての大学の役割
Author(s)	
Citation	年次学術大会講演要旨集, 7: 13
Issue Date	1992-10-22
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5331
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	パネルディスカッション

パネル討論

研究拠点としての大学の役割

司 会	権 田 金 治	
パネリスト	岡 久 雄	三菱電機
	富 浦 梓	新日本製鐵
	西 川 哲 治	東京理科大学
	古 川 静二郎	東京工業大学

趣 旨

わが国の大学が明治維新以来、西欧近代科学の導入を積極的に図り、日本の科学技術の研究拠点として重要な役割をはたして来たことは改めて指摘するまでもないことであろう。しかしながら、戦後の教育改革とそれに伴う新制大学の設立は大学教育の量的拡大に寄与してきたことは明らかであるが、その質的向上に対する評価は旧制大学も含めて必ずしも定まっていない。特にわが国経済の高度成長期以降、民間企業に於ける研究開発が活発化するにつれて、大学への期待は、少なくとも自然科学系分野に於ては、フロンティア研究拠点としてへの期待から一步後退し、むしろ、教育機関としての役割への期待が増すようになってきた。もちろん、今日でも、大学は教育機関であると同時に高度な研究機関であるとする考えは一般的に受け入れられているが、その根底には教育と研究は不可分であるとする認識があるからに外ならない。しかしながら、近年大学院も含め、科学技術に関する最も新しい情報の取得は分野によっては民間企業の方が先行していると云われているのみならず、研究費及び研究施設の量的充実に於ても、また研究者の質的向上に於ても明らかに大学のそれを上まわっていると云われている。すでに研究開発はそれ自身ひとつの新しい産業として独自の道を歩み始めているとみるべきなのかも知れない。

しかも、わが国大学の研究費全体に占める基礎研究費比率は平成2年度で52.9%にとどまって居り、応用研究・開発研究の占める比率とはほぼ拮抗している。大学が学術基礎研究の中心であるとする定説とは逆の傾向を示して居り、その傾向は近年むしろ加速される方向にある。さらに、これを民間と比較してみると、基礎研究費の使用額は、平成2年度で大学が701億円、民間が589億円となって居り、大学と民間との格差は年々縮小する傾向にある。すでに大学の基礎研究機関としての役割は終わりつつあるとみるべきなのであろうか評価の分かれるところである。大学の研究拠点としての役割が問われている理由である。

本パネル討論は、こうした時代的背景をふまえ、わが国の大学が今後、基礎研究を担う高度な研究機関としての役割をはたし得るものなのか否か、あるいははたすべきなのか否かについて、それぞれの立場から自由に討論していただくことを目的として開催することとします。従って、本討論ではあくまで教育機関としての大学ではなく、研究機関としての大学の役割、あるいは大学に於ける研究のあり方とその社会的役割について討論していただくこととします。